人道の絆

敦賀・ポーランド・リトアニア

▼2▲

ムゼウム資料充実へ

上陸100年 帰国後追う

首都ワルシャワから約300キロ離れたバルト海近くのポーランド北部の町、ヴェイヘロヴォ。この町には、1920～22年に日本が救済したポーランド孤児が帰国後、しばらく集団生活して教育を受けた建物が残っている。

築100年以上のれんが造りで重厚な雰囲気。現在は障害を持つ子どもたちが通う学校として使っている。孤児たちは当時、この場所でポーランド語を学んだり、日本の歌を習ったりしていた。

敦賀市の使節団は今回訪問できなかったが、先に同国入りした市人道の港発信室の西川明徳室長が視察した。

「孤児たちが実際に生活した建物が残っていたことに感動した」と西川室長。「孤児が上陸した敦賀と、その後過ごしたヴェイヘロヴォ。〝現場〟という意味でつながりを大変感じた」と今後の交流に思いを巡らせた。

■ ■ ■

日本が救済事業を展開した当時、孤児たちの年齢は1歳から16歳だった。帰国後の1929年、青年となった元孤児の有志が集まり「極東青年会」を設立。在留邦人らを招いた「桜の夕べ」を開くなど、恩義のある日本との交流に力を注いだという。

現在、元孤児はほとんどが亡くなっているとみられ、もはや証言は取れない。ただ、ワルシャワ在住のジャーナリスト松本照男さん(75)はワルシャワ大教授とともに80年代、元孤児50人余りを取材し資料を集め、本も出版した。

「元孤児たちは日本滞在時のことをはっきりと覚えていて、お辞儀が面白かったとか、枕投げが楽しかったとか、いろいろな思い出を話した。『もしもし、かめよ…』の童謡を歌ったりもしたよ。上陸地の敦賀のことも覚えていた」と松本さん。当時の手記や写真などを元孤児から提供してもらったという。

■ ■ ■

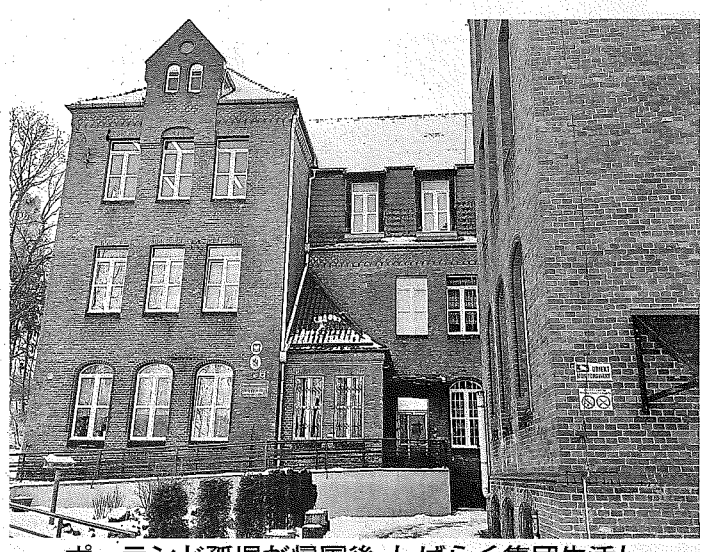
敦賀市使節団が今回ポーランドを訪れた目的の一つは、孤児の史実を紹介する同市の資料館「人道の港敦賀ムゼウム」の資料充実だ。市は来館者数増で手狭になったムゼウムの移転拡充を計画し、2020年度のオープンを目指す。同年はくしくも孤児上陸100周年と重なる。

市の使節団は松本さんに資料提供の協力を依頼。交渉は継続中で、西川室長は「新ムゼウムに、孤児たちの日本滞在時の〝証〟を展示したい」と力を込める。

現在のムゼウムで孤児関連の展示は、敦賀上陸までの紹介が中心の構成だ。「孤児たちが祖国に帰った後、どうなったかなどについて資料充実を進めたい」(渕上隆信市長)考えもある。

孤児たちのその後の人生を追い、その子孫にも接点を広げたい―。孤児上陸100年に向け、市は大きな目標を持った。

(青木伸方)



ポーランド孤児が帰国後、しばらく集団生活していた建物。現在は障害を持つ子どもたちが通う学校として使われている＝ヴェイヘロヴォ(敦賀市提供)